

給水開始から60年を迎えました

昭和27年5月、苫小牧市内の一部に水道水の供給が開始されてから今年で60年を迎えました。

上水道計画

「飲料水ハ概シテ良好ナラズ、故ニ村民移住当時ハ、一時的胃腸障害ヲ来タシ、下痢或ハ皮疹ヲ発生スル者多シ、適当ノ給水法ニヨリ水質ノ改良最モ必要ナリ」・・・と。

井戸水を利用していた大正初期の苫小牧村の水事情により村会に打ち出された「火防用及び雑用水の水路設置計画」は、工期を含め正式に決定されたものの、資金不足から実行には至りませんでした。

後の昭和5年、新たに上水道計画として約9ヶ月を要し調査、まとめられた「苫小牧町上水道調査書」は、北海道帝国大学演習林地内（現北大研究林）を貫流する幌内川を水源としたB6版46ページに及ぶもので、昭和6年に発表されました。

この計画は、計画給水人口1万6000人、計画取水量9万6000立方尺（2671m³）、総工事費29万円で、水道特別会計として経理することを原則とした財政計画が

立てられ行政報告されたものの、第1次世界大戦後の不況と関東大震災による金融恐慌の時代を迎え、全額を起債と補助金で賄う上水道建設事業であっても、その布設は非常に無理な財政状態となりました。

一方町民側においても、大正期から急速に発達した「竹管による掘り抜き井戸」の流行により、さほど困らない水事情となったことから、町もこれに甘んずる結果となり、ついに戦前においては上水道の実現を見ることはありませんでした。

しかし、この計画書は本格的かつ極めて優れていたことから、後の本市上水道計画への重要な資料として受け継がれることになりました。



自噴する掘り抜き井戸

終戦を迎えた苫小牧町は、戦後の復興目覚しく、昭和23年には市制が施行されるとともに、都市としての必要条件でもある上水道布設の機運がいよいよ高まり、昭和24年12月、万難を排し上水道実現に向け市議会議員協議会に「上水道布設について」の協議案が提出されました。

議案書はもちろん、先人の苦難によって作られた調査書を基に、水源を幌内川に定め、計画給水人口2万8100人、1日最大給水量8100m³、工事費1億1000万円とした実施計画で、議会はこの計画に対し全員一致をもって『事業邁進』と決定しました。

ちなみにこの頃の米価は、10kg換算で286円60銭でした。

上水道新設工事の着工

こうしてついに長年の懸案事項は結実し、昭和25年1月、厚生大臣に提出した「上水道新設工事認可申請書」は同年8月に認可されいよいよ事業着工の運びとなりました。

そして、昭和27年5月、市内の一部（東は旭町から西は弥生町）に待望の上水道の供給が開始され、昭和28年には創設事業が完工しました。

以降、木場町及び旧緑町地区（現緑町、音羽町、双葉町、住吉町、三光町、

春日町）の給水区域の拡張、さらに国庫補助による錦岡、沼ノ端、勇払、錦岡公営住宅団地の順に掘り抜き井戸の「簡易水道」を設置（昭和48年までに給水区域に包括し廃止）するなど、着実に進展しました。

その後、昭和38年に開港することとなる工業港に将来を託していた市は、工業の発展と企業の誘致によって莫大な人口増を見込むこととなり、水道事業としても根本的な対策を講ずる必要性に迫られ、水道事業はいよいよ拡張の時代へ入ることとなりました。

昭和37年、将来の水需要と給水区域の拡張のため、新たに水源を勇払川に求め、計画給水人口13万9000人、1日最大給水量4万4500m³とした第1次拡張事業に着手し、昭和40年には幌内系の施設に加え、高丘系の施設が完成しました。

これによって、これまで塩素滅菌のみで給水していた創設時の水道も、高丘浄水場の緩速ろ過池へと合流され、日量4万4500m³の能力をもって供用開始されることとなりました。

さらに、昭和49年には港の拡充、企業の進出、苫小牧東部開発計画の推進などによる人口の増加、また下水道の普及と環境整備などに伴う水量増が予測されたことから計画給水人口20万6000